

### 漢文読解の基礎

#### ●はじめに

漢語(中国語)は、言語学的には孤立語というタイプに分類される。孤立語は、語形変化がないのが特色である。主語になっても述語になっても、語としての漢字はそのまま形が変わることはない。これは膠着語(日本語・朝鮮語など)・屈折語(欧米諸国語など)に語形変化があるのと大きく異なる点である。

語形変化のない孤立語である古代漢語にもとづく漢文の語法は、「語順への依存」によって支えられる。したがって漢文を理解するためには、語順に注意して語法を構造的に把握することが何よりも重要である。それによって漢文訓読の仕組みも理解できるようになるし、返り点に従って訓読し書き下したものの(いわば訓読調の古文)に頼らずに、漢文を漢文の構文それ自体に沿って、いっそうよく理解できるようになる。

そこで、本解説に引用する漢文は、その構文の組み立てが把握しやすいように、以下のような括弧や符号などを用いて示した。なお、例文は「大学入試センター試験(共通一次試験を含む)」の出題漢文を中心に選んだ。

- 一、解説での文を構成する成分については、主語  $\parallel$  S、述語  $\parallel$  P、目的語  $\parallel$  O、として示す。
- 二、基本構造の「主述構造(S  $\parallel$  P)」は、「 $\parallel$ 」を主語と述語との間に、「述語構造(P  $\parallel$  O)」は、「 $\parallel$ 」を述語と目的語との間に示す。
- 三、付加的な構造の「修飾構造」は、修飾語を「 $\sim$ 」で括って被修飾語の前に置き、「前置詞構造」は「前置詞 O」として示す。「並列構造」は接続詞のない場合は、その間に「 $\sim$ 」を置き、接続詞のある場合は接続詞を「 $\sim$ 」で括って示す。「述補構造」は補語を「 $\sim$ 」で括って示す。
- 四、助詞は「( )」、兼語は「[ ]」、語句のまともりは「 $\square$ 」で示す。

#### 一、品詞の区分

漢文(古代漢語)の品詞は、左表のように、単独で文の成分または独立成分となりうる「実詞」と、単独では文の成分となることができず、語法上の働きをするだけの「虚詞」とに分類される。

実詞	名詞	代詞	動詞	副詞	前置詞	助詞	助詞	感嘆詞
	助動詞		形容詞					
虚詞	助動詞	前置詞	助詞	助詞	助詞	助詞	助詞	助詞
	助動詞	前置詞	助詞	助詞	助詞	助詞	助詞	助詞

- ①名詞……人物や事物の名称などを示す普通名詞と、人名・地名・書名などを表す固有名詞とがあり、文の中では主語や目的語となる。時間(今昔など)や方位(上・下、前後、右・左、東・西・南・北など)を示すものは、時間詞・方位詞ともいい、主語や目的語になり、また副詞のようにも使われる。
- ②動詞……人物や事物の動作や行為、思考・意志・感覚などの心理活動や、状況・存在・事物の変化や状態、類似や比較、あるいは判断などを表し、文の中で述語となる。
- ③助動詞……可能や願望・当為などを表す。能願動詞ともいい、特殊な動詞の一種である。
- ④形容詞……人物や事物の形状や性質、動作や変化の状態を表し、文の中では主に述語となったり、名詞を修飾したりする。また述語を修飾する連用用法もある。
- ⑤数詞……数を表し、主に直接、名詞や動詞を修飾するが、主語や目的語、述語にもなる。
- ⑥量詞……事物や動作を計量する語で、ふつう数詞と結合して名詞を修飾したり、唐代以降の用法では動詞の補語になったりする。

#### 二、文を構成する基本的な成分

- ①主語 S……主語は、述語の前に置く成分で、行為の主体や主題、存在の範囲などを表し、主として名詞・代詞が当てられる。場合によっては動詞・形容詞・句などが主語となり、それらは名詞ないしは名詞句化したものと見なす。
- ②述語 P……述語は、主語の後に置き、主語に対して描写や説明をしたり、その行為・動作・存在を表したり、認定や判断をし、主に動詞・形容詞が当てられ、名詞もそのまま述語となる。述語となった名詞は動詞化したものと見なす。
- ③目的語 O……目的語は、述語の後に置き、述語に対して、その内容・対

#### 三、文を構成する基本構造

##### 〈一〉文の三成分

主語・述語・目的語の三つの成分が、基本要素となって文を作る。

主述構造  
S(主語)  $\parallel$  P(述語)  $\parallel$  O(目的語)  
述語構造  
[主述構造] (S  $\parallel$  P)  
[述語構造] (P  $\parallel$  O)

「主語・述語」「述語・目的語」の組み合わせは、その結合の度合いが強いことからそれぞれ「主述構造」「述語構造」という。

漢文は、この二つの基本構造「主述構造(S  $\parallel$  P)」「述語構造(P  $\parallel$  O)」から成り立っているということができる。また、二字の熟語の一部もこの構造からできている。

##### 〈二〉主述構造(S $\parallel$ P)

(一)主述構造(S  $\parallel$  P)において、主語は述語に対する関係から、次のように区分される。この構造は日本語と語順が同じであるから、訓読では、いわゆる返読(  $\parallel$  返り点で返って読むこと)をすることはない。

- ①施事主語……述語の動作・行為に対して働きかける主体

余二問故。(200)『雪濤小説』 余問故私は理由をたずねた。

②受事主語……述語の動作・行為から働きかけられる対象  
 車二成。(2001「追説苑」) 車成<sub>なり</sub>も國車が完成した。

③主題主語……述語の描写や判断などの対象となる主題  
 詩二固好。(1999「追逸老堂詩話」) 詩固好<sub>よし</sub>も國詩は当然いい。

④存在主語……存在を確認する場所や範囲  
 此二必(有)故。(2000「臣氏春秋」) 此必有<sub>あり</sub>故<sub>ゆえ</sub>も國これには必ず事情がある。

(2) 主述構造(S=P)の文は、述語の品詞の違いによって、次のように区分される。

①名詞述語の主述文(判断文)……S=P(名詞)

鮑叔二君子(也)。(2005「千百年眼」) 鮑叔君子也<sub>なり</sub>も國鮑叔は君子である。

▼名詞述語に準じて、数詞あるいは数詞と量詞とが結合した数量句が述語となる文がある。

高五尺。(2004「追齋雜記」) 高五尺<sub>たかごふし</sub>も國高さは五尺である。

②形容詞述語の主述文(描写文)……S=P(形容詞)

天二寒。(1998「口追焚書」) 天寒<sub>あまひや</sub>も國天候は寒い。

③動詞述語の主述文(叙述文)……S=P(動詞) S=P(動詞) O  
 父二怒。(1997「搜神記」) 父怒<sub>ちちいか</sub>も國父は怒った。  
 王莽二篡位。(2001「追後漢書」) 王莽篡<sub>まうさう</sub>位<sub>ゐ</sub>も國王莽が帝位を奪った。

④主述述語(主述構造が述語)の主述文……S=P[S=P] O

なお必ず良医なのである。

※古漢語の判断文では名詞や名詞句が直接述語となるが、代詞「是」の判断動詞への転化が漢代以降一般化し、述語構造を形成するようになった。

唐臨一為大理卿。(2001「大唐新語」) 唐臨為<sub>なり</sub>大理卿<sub>なり</sub>も國唐臨が大理卿になった。  
 心如鉄石。(2001「大唐新語」) 心如<sub>ごと</sub>鉄石<sub>なり</sub>も國心は鉄や石のように堅固である。  
 古二猶今(也)。(1995「列子」) 古猶<sub>ごと</sub>今<sub>なり</sub>也<sub>なり</sub>も國昔も今と同じである。

③目的語が、動詞の理由や目的を説明する場合。

死一其(君)。(2002「追新序」) 死<sub>し</sub>其<sub>を</sub>君<sub>を</sub>も國主君のために死ぬ。

④目的語が、述語の実質上の主語となる場合。

存在関係(有・無)を表す「存在文」と自然現象を表す「現象文」とがあり、合わせて「存在文」ともいう。存在文においては、主語は存在(ないしは非存在)を指摘すべき場所や対象範囲を表し、現象文でもその現象の生起する範囲などを示す。いずれの文においても主語は省略されることが多い。また、目的語が実質上の主語となっている。

<a> 存在文

S(場所・範囲)二P(有/無) O(実質上の主語)

貌二有(愁色)。(1997「追三國志」) 貌有<sub>あり</sub>愁色<sub>なり</sub>も國顔つきには心配そうな様子があった。

有説(則)可、無説(則)死。(1980「追莊子」) 有<sub>あり</sub>説<sub>あり</sub>則<sub>は</sub>可<sub>なり</sub>、無<sub>なし</sub>説<sub>なし</sub>則<sub>は</sub>死<sub>す</sub>も國弁明ができるなら良いが、弁明ができないなら殺すぞ。

虎狼二(人)二皆(悪)。(2007「口追山志」) 虎狼人皆悪<sub>なり</sub>も國虎や狼は誰もがこれを憎む。

<三> 述語構造(P=O)

述語構造(P=O)は、述語となる動詞とその目的語(その数が〇)との関係によって、それぞれ内容がいくつかに分類される。なお、この構造は日本語と語順が逆になるので、目的語が〇の場合を除き、訓読では返読する。

(1) 目的語が〇の述語構造……S=P

①動詞がいわゆる自動詞の場合。

魯公二喜。(1997「鉄山叢談」) 魯公喜<sub>なり</sub>も國魯公は喜んだ。

②代詞「自」述語の前に置くや副詞「相」を伴った場合。

(佳)兵(者)二自(焚)。(2008「杜梅堂文集」) 佳兵者自焚<sub>なり</sub>も國すべ<sub>は</sub>兵者は自らその身を焼く。  
 鬱(与)口二相(触)。(1991「口追袁中郎全集」) 鬱与<sub>は</sub>口<sub>と</sub>相触<sub>なり</sub>も國胸中の憂いと口の働きが触れあう。

(2) 目的語が一の述語構造……S=P=O

①目的語が、動詞の作用の対象となる場合。《ほぼ英語の目的語(object)に相当する》  
 王二乱班。(2001「大唐新語」) 王乱<sub>なり</sub>班<sub>を</sub>も國王は席次を乱されています。

②目的語が、帰属や性質などの判断や類似の対象となる場合。《ほぼ英語の補語(complement)に相当する》判断詞としての「是」は「為」や類似を表す「如・若・猶(由)」が属する。  
 (即)是(良)医。(1981「三朝名臣言行録」) 即是<sub>なり</sub>良医<sub>なり</sub>も國とりも

※存在文を訓読する時は、主語・場所・範囲には「は」「に」「を」を送り、目的語を実質上の主語と解して格助詞を送らず、「S(場所)範囲二O(実質上の主語)有リ・無シ」のように読む。

▼「多・少・鮮・寡」などの形容詞も存在文に準じた文を作る。この場合、これらは動詞化している。

国二多(賢)臣。(1995「列女伝」) 国多<sub>なり</sub>賢臣<sub>なり</sub>も國賢明な臣下が多くなる。  
 (恒)雨(少)日。(1985「追韋中丞論師道書」) 恒雨<sub>なり</sub>少日<sub>なり</sub>も國いつも雨が降って日差しが少ない。

<b> 現象文

(大)雨(雪)三日。(1998「追焚書」) 大雨<sub>なり</sub>雪<sub>なり</sub>三日<sub>なり</sub>も國大雪が降った。

※「開花」「降雨」「断水」などの熟語もこの現象文に由来する。

(3) 目的語が二の述語構造……S=P=O=O

①授与動詞の場合……「与・賜・予・授・遣・貽・錫……」などいわゆる授与動詞のときには、英語と同様に二重の目的語をとる。ふつう前には「人物目的語」、後には「事物目的語」を置く。

(乃)賜(之)酒。(2003「追三國志」) 乃賜<sub>なり</sub>之<sub>を</sub>酒<sub>を</sub>も國そこで彼馬を盗んでいた人物に酒を与えた。

②教示や質問の動詞の場合……「教・語・問・質・謂・示・告……」など、教えたり質問したり、また名称を示したりする動詞のとき、二重の目的語とする。

桓公二(每)質(之)鮑叔。(2005「口追千百年眼」) 桓公每質<sub>なり</sub>之<sub>を</sub>鮑叔<sub>を</sub>も國桓公は「とあること」を鮑叔に尋ねた。



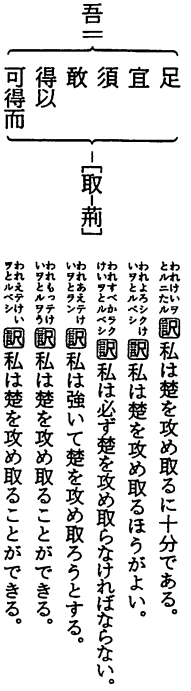
五、助動詞

〈一〉助動詞の語法的特質

助動詞は「能願動詞」ともい、「述語構造(P-O)」の目的語をとる点が特別であるがその働きは動詞と同じであり、語法上の組み立ては述語構造と同じである。

S=P(助動詞)-O(P-O)

たとえば「吾二欲一取一荊」。(1998『淮海集』) 吾欲取荊(おれは荊を取らねばならぬ) 楚を攻め取りたいと思う。で、助動詞「欲」の代わりに、次のように種々の助動詞を代入することも可能である。



〈二〉助動詞の類別

Table with 2 columns: 類別 (Classification) and 意味 (Meaning). Rows include 可能 (Possible), 足 (Sufficient), 宜 (Suitable), 須 (Necessary), 敢 (Dare), 得 (Obtain), 取 (Take).

病氣を治すことができる。

〔杖〕(不)能〔中風〕。(2006『胡祭酒集』) 杖不能中風(杖は風に当てられなかった)。

〈三〉助動詞の複合

①「可」得「足」は「以(而)」を添えて「可以(而)」「得以(而)」「足以」と複合した助動詞となる。意味は「可」得「足」と変わらない。

〔知此〕者二可以「用兵」(矣)。(1998『淮海集』) 知此者可二以用兵矣(このことがわかってゐる者は、軍を指揮して戦争をすることが出来る)。

〔皆得而〕取(也)。(1984『追都離子』) 皆得而取也(誰もが取る事が出来る)。

②「得」は「可」とも用いて「可得」「また」を添えて「可得而」と複合した助動詞となる。

可得〔度〕也。(1997『搜神記』) 可得度也(國生き続けることが出来る)。

〔夫子之〕文章二可得而一聞(也)。(論・公治長) 夫子之文章可得而聞一也(先生の礼案の威儀は耳にすることができた)。

※訓読では「以テラス可シ(可二以一)」「以テラスルニ足ル(足二以一)」「以テラスルヲ得(得二以一)」「以テラスルヲ得可シ(可得二)」「得テラス可シ(可二得而一)」「得而」なども読む。

六、代詞

代詞の種類は以下のようにまとめられる。

Table with 4 columns: 類別 (Classification), 意味 (Meaning), 例 (Examples), 語法的機能 (Grammatical Function). Rows include 一人称 (Single Person), 二人称 (Double Person), 三人称 (Triple Person), 近称 (Proximal), 遠称 (Distal), 虚称 (Fictitious), 傍称 (Marginal), 無称 (Nameless).

※助動詞を訓読する方法は、日本語の助動詞でそのまま対応できるものもあるが、副詞や動詞として読んだり、あるいは副詞と助動詞の連合(再読)として読んだり様々で、中には同一の助動詞に対して肯定文と否定文とで異なる場合もある。

Table with 2 columns: 必要 (Necessary) and 願望 (Wish). Rows include 宜 (Should), 当 (Should), 須 (Must), 合 (Should), 欲 (Want), 願 (Wish), 忍 (Endure), 肯 (Willing), 敢 (Dare), 受動 (Passive), 見 (See).

〔夫〕君子二可「欺」以「其方」。(2008『閻微草堂筆記』) 夫君子可欺以「其方」(君子は其方(その方法)で欺かすことができる)。

〔即〕能「去」疾」。(2003『太平広記』) 即能去疾(疾を去る)。

七、副詞

〈一〉副詞の語法的機能

副詞は、連用修飾語として「述語構造」の前に置き、述語に対して程度や範囲・時間・否定・反語などをさまざまに意味合いを加える重要な働きをもつ。この副詞の使用によって、漢文の表現は非常に豊かになる。

S 二(副詞) P-O

たとえば、「王乱班」の「王」は席次を乱されています。(2001『大唐新語』)を基本として、この文に副詞を加えることによって、異なるいくつかの文が作られることになる。

唯	「限定形」 <small>ひがひがし</small> 國王はただ席次を乱されているだけです。
已	「過去形」 <small>ひがひがし</small> 國王はとくに席次を乱されていきました。
将	「将来形」 <small>ひがひがし</small> 國王は席次を乱されようとしてい
不	「否定形」 <small>ひがひがし</small> 國王は席次を乱していません。
豈	「反語形」 <small>ひがひがし</small> 國王はどうして席次を乱されま

副詞は、時に文頭に置いて文全体にかかる場合がある。

〔会〕太宗 二幸寺。(2001『大唐新語』) 会太宗幸寺は太宗が大理寺に行幸された。

〈二〉副詞の類別

類別 常用の例

程度	極度 頗(すこぶ)る、殊(ことごと)く、良(まこと)ニ
副詞	少(すこ)シ、稍(やや)、略(ぼ)ぼ、微(わず)かニ
範圍	益(ますます)、愈(いよいよ)、尤(もっとも)、更(さら)ニ、皆(みな)、悉(ことごと)く、具(備)つ、亦(また)、唯(但)徒(特)止(第)た(タ)ニ、獨(ひとり)ニ
副詞	俱(同)共(とも)ニ、互(たが)た(タ)ニ、交(こも)も(も)、相(あ)互(あ)ひ(あ)り(あ)り
時間	過去 已(既)業(す)で、嘗(曾)か(つ)つ、向(曩)さ(き)ニ
副詞	方(正)ま(ま)ニ
時間	現在 将(且)ま(ま)ニ、ト(ト)ス、行(ゆく)く、垂(なん)なん(ト)ス
副詞	欲(ほ)つ(ス)
時間	終局 終(卒)竟(つ)い(ニ)
副詞	緊接 俄(遽)尋(に)わ(カ)ニ、立(た)ち(ど)ろ(ニ)、即(す)な(わ)ず
時間	恒常 恒(常)雅(つね)ニ、業(も)と(ヨ)リ、久(長)ひ(さ)シク
副詞	變化 稍(漸)や(う)や(ク)、徐(お)も(む)ロ(ニ)
時間	適時 適(ま)さ(ニ)、會(属)た(ま)ま(タ)
副詞	重複 復(又)亦(また)、更(さら)ニ
數量	數(屢)亟(しばしば)、頻(し)き(り)ニ
副詞	謙敬 窃(ひそ)か(ニ)、伏(ふ)し(テ)
副詞	謙敬 請(こ)つ、辱(かたじけ)な(ク)モ、謹(つ)つ(し)ン(テ)
副詞	否定 不(弗)ず、非(あら)ズ、未(い)ま(タ)ズ
副詞	禁止 莫(無)勿(毋)な(カ)レ
副詞	確定 必(定)か(ら)ズ、誠(実)信(良)ま(ま)に(ニ)、固(も)と(ヨ)リ
副詞	推定 殆(庶)幾(ほと)んど、蓋(け)た(シ)、或(ある)イ(ハ)
副詞	反語 豈(あ)ニ、何(庸)詎(寧)なん(、)、獨(ひと)り、安(患)焉(鳥)い(ず)ク(ソ)

七、副詞

〈一〉副詞の語法的機能

副詞は、連用修飾語として「述語構造」の前に置き、述語に対して程度や範囲・時間・否定・反語などをさまざまに意味合いを加える重要な働きをもつ。この副詞の使用によって、漢文の表現は非常に豊かになる。

S 二(副詞) P-O

たとえば、「王乱班」の「王」は席次を乱されています。(2001『大唐新語』)を基本として、この文に副詞を加えることによって、異なるいくつかの文が作られることになる。

唯	「限定形」 <small>ひがひがし</small> 國王はただ席次を乱されているだけです。
已	「過去形」 <small>ひがひがし</small> 國王はとくに席次を乱されていきました。
将	「将来形」 <small>ひがひがし</small> 國王は席次を乱されようとしてい
不	「否定形」 <small>ひがひがし</small> 國王は席次を乱していません。
豈	「反語形」 <small>ひがひがし</small> 國王はどうして席次を乱されま

副詞は、時に文頭に置いて文全体にかかる場合がある。

〔会〕太宗 二幸寺。(2001『大唐新語』) 会太宗幸寺は太宗が大理寺に行幸された。

〈二〉副詞の類別

※副詞の訓読は、ほとんどの場合日本語の副詞で対応できるが、否定副詞や「将来」を表す時間副詞については再読文字や動詞として読むなど、注意が必要である。

〔將〕彈上。(2001『大唐新語』) 將「彈」之は彈を射して唐道宗を弾劾しようとした。

公二且「賜」占夢(者)。(1992『追憶春秋』) 公且「賜」占夢者「予」は公に夢を占う術者に褒美しようとした。

山二青「花」欲然。(杜甫詩「絶句」) 山青花欲然は青々として花は咲きそうである。

蜀(軍)二垂至。(三國「姜維伝」) 蜀軍垂至は蜀軍がやってくるであろうである。

此(觀)二未有花。(1987『本事詩』) 此觀未有花は観るべきものがない、この道教の寺院にはまだ桃の花は無かった。

八、前置詞

〈一〉前置詞の区分

類別	内	容	前置詞の例
時処前置詞	時間や場所を表示する		自於、于、由、当、在、從
原因前置詞	原因や目的・理由などを表示する		為、因、以、用、由
方式前置詞	方法や手段・根拠などを表示する		以、因、用
関係前置詞	対象・比較・処置・受動などを表示する		於、為、与、對

〈二〉主な前置詞の用法

(1)「於」(于・乎)の用法

漢文読解の基礎

類別 常用の例

程度	極度 頗(すこぶ)る、殊(ことごと)く、良(まこと)ニ
副詞	少(すこ)シ、稍(やや)、略(ぼ)ぼ、微(わず)かニ
範圍	益(ますます)、愈(いよいよ)、尤(もっとも)、更(さら)ニ、皆(みな)、悉(ことごと)く、具(備)つ、亦(また)、唯(但)徒(特)止(第)た(タ)ニ、獨(ひとり)ニ
副詞	俱(同)共(とも)ニ、互(たが)た(タ)ニ、交(こも)も(も)、相(あ)互(あ)ひ(あ)り(あ)り
時間	過去 已(既)業(す)で、嘗(曾)か(つ)つ、向(曩)さ(き)ニ
副詞	方(正)ま(ま)ニ
時間	現在 将(且)ま(ま)ニ、ト(ト)ス、行(ゆく)く、垂(なん)なん(ト)ス
副詞	欲(ほ)つ(ス)
時間	終局 終(卒)竟(つ)い(ニ)
副詞	緊接 俄(遽)尋(に)わ(カ)ニ、立(た)ち(ど)ろ(ニ)、即(す)な(わ)ず
時間	恒常 恒(常)雅(つね)ニ、業(も)と(ヨ)リ、久(長)ひ(さ)シク
副詞	變化 稍(漸)や(う)や(ク)、徐(お)も(む)ロ(ニ)
時間	適時 適(ま)さ(ニ)、會(属)た(ま)ま(タ)
副詞	重複 復(又)亦(また)、更(さら)ニ
數量	數(屢)亟(しばしば)、頻(し)き(り)ニ
副詞	謙敬 窃(ひそ)か(ニ)、伏(ふ)し(テ)
副詞	謙敬 請(こ)つ、辱(かたじけ)な(ク)モ、謹(つ)つ(し)ン(テ)
副詞	否定 不(弗)ず、非(あら)ズ、未(い)ま(タ)ズ
副詞	禁止 莫(無)勿(毋)な(カ)レ
副詞	確定 必(定)か(ら)ズ、誠(実)信(良)ま(ま)に(ニ)、固(も)と(ヨ)リ
副詞	推定 殆(庶)幾(ほと)んど、蓋(け)た(シ)、或(ある)イ(ハ)
副詞	反語 豈(あ)ニ、何(庸)詎(寧)なん(、)、獨(ひと)り、安(患)焉(鳥)い(ず)ク(ソ)

〔場所〕乃(乃)于舟中「杼思」。(2002『因話録』) 乃于舟中「杼思」は乃が舟の中で杼思を練った。

桓公二読書「於」堂上。(1980『追憶』) 桓公読二書於堂上は桓公が堂の中で本を読んでいた。

有(有)人「於」此。(1996『列子』) 有(有)人「於」此はここに人がある人がいる。

〔時間〕孟子二生「於」是時。(1986『電川文集』) 孟子生「於」是時は孟子がこの時代に生まれた。

〔範圍〕公二「於」賞鑿「非」当行。(2003『閩微草堂筆記』) 公於賞鑿「非」当行は公が賞鑿をあたうに当らず、非当行である。

〔受動〕蔽「於」魯(也)。(2007『山志』) 蔽「於」魯は魯に蔽はれるからなのである。

〔比較〕速(速)亡二愈「於」久(生)。(1990『列子』) 速亡愈「於」久(生)は速く死ぬるに於いて、長く生きるに於いて速く死ぬることになる。

※前置詞構造「於」○は、述語構造の前に置いたときは「○ニ於」イテと訓読するが、後に置いたときは「於」を置き字として「○ニ」と読む。ただし、一般動詞が述語の場合は、「①目的語」「②前置詞構造の目的語」の順に読むが、存在動詞「有」無の場合はそれと異なり、「①前置詞構造の目的語」「②目的語」の順に読む。また受動と比較の用法の場合は、「於」○を常に述語構造の後に置く。

(2)「以」(用)の用法

〔手段〕請「以」粟食之。(2003『新書』) 請「以」粟食之は請うて粟を食料として水鳥を飼わせたこと。

〔根拠〕臣(也)「以」臣(之)「事」觀之。(1980『追憶』) 臣也以「臣」之「事」觀之は臣は私の仕事を根拠として考察しよう。

〔対象〕世(之)学者(二)動(一)以(一)杜詩(詩)為難解。(2010)野鴻詩的「世之学者動以三杜詩一為難解」(じよのまがくしゃもんがくたいとくせいせい) 國世間の学問を修めようとする人はどうかすると杜甫の詩を難解であると考ええる。

〔時間〕文(二)以(一)五月五日(日)生。(史・孟嘗君伝) 文(二)以(一)五月五日(日)生(よひはいつにいつにうま) 國孟嘗君は五月五日に生まれた。

〔理由〕唐(韓幹)以(一)貌(馬)馬(二)召(召)。(2008)衛廬精舍藏稿「唐韓幹以貌馬召」(たうかんがんでんがまのまがまをよぶ) 國唐の韓幹は馬を描く才能によって(玄宗皇帝に)招かれた。

※以(〇)は、述語構造の前に置いたときは「〇ヲ以テ」と訓読するが、後に置いたときは「(スルニ)〇ヲ以テス」と、「以」を動詞として読む。

(3) 「自」の用法

〔起〕孟子比(二)自(晋)晋(史・楚世家) 子比自(晋)晋(しひん) 國子比が晋から楚に帰った。

秦(質)子(二)自(趙)趙(史・秦始皇紀) 秦(質)子(二)自(趙)趙(しん) 國秦の人間が趙から帰った。

〔自今(二)勿(一)復(為)此(飾)飾。(2002)追(楊文公談苑) 自(今)勿(復)為(此)飾(飾) 國今後は一度とそのような装飾を施してはいけない。

〔原因〕禍(二)自(怨)怨(起)。(史・孝文紀) 禍(二)自(怨)怨(おこ) 國災いは怨恨から生まれる。

〔準拠〕何(自)敢(言)言(若)若(主)。(1991)追(史記) 何(自)敢(言)言(若)若(主) 國何に基づいて強いてお前達の主人を批判するのだから。

※「自」〇は、述語構造の後に置いたときは、前に置いたときと同様に「〇自より」と読む場合と、「〇自よりス」と動詞として読む場合がある。

(4) 「為」の用法

を。語氣助詞は、文にさまざまなニュアンスを与える。これらの助詞は用いないこともあるが、その場合でも文の意味は基本的には変わることとはない。

夫(君)也(二)民(之)父(母)也。(2003)追(新書) 夫(君)者(民)之(父)母(也) 國夫もその民の父もその君もその民の父である。

君(二)民(之)父(母)。君(民)父(母) 國君もその民の父である。

〈二〉「N」の用法

①連体修飾語の後に置き、「修飾構造」であることを明確に示す。なお、訓読では修飾語が名詞や名詞句の時は「の」と読むが、述語構造の時は読まずに動詞の連体形で被修飾語に接続する方が適切である(ただし、「の」と読むことも行われている)。

〔修飾語(N)〕被修飾語

公(二)必(行)行(夷)吾(之)言。(2005) I・II「千百年眼」 公(必)行(夷)吾(之)言(言) 國公はぜひとも夷吾の言葉とおりにして下す。

〔辟(火)之(不)確。(2003)「閩徵草堂筆記」 辟(火)之(不)確(確) 國彈丸を避けられるという話は確かではない。

②主語と述語との間に置いて、文としての独立性を取り消し、複文の句成分(主語・目的語)となったり、重文の節を作ったりする。なお、訓読では「の」と読む。

S(N) = P……主述構造(S句)

〔子(之)〕居(喪)喪(礼)乎。(2001)追(後漢書) 子(之)居(喪)喪(礼)乎(乎) 國あなたの喪に服する態度は、礼であろうか。

胡(子)懼(風)風(之)傷(其)書。(2006)「胡祭酒集」 胡(子)懼(風)風(之)傷(其)書(書) 國胡子は風が自分の蔵書を損なうのを心配した。

〔原因〕夫(忠)臣(与)孝(子)不(為)昭(昭)信(節)不(為)冥(冥)墜(墜)行。(1996)「列女伝」 夫(忠)臣(与)孝(子)不(為)昭(昭)信(節)不(為)冥(冥)墜(墜)行(行) 國夫もその忠義な臣下と親孝行な子とは見られているからといって礼節を誇張して行うことはしないし、暗くて見えないからといって礼の行いを怠ることもない。

〔目的〕魏(公)子(為)鳩(鳩)報(仇)。(1996)「論衡」 魏(公)子(為)鳩(鳩)報(仇) 國魏の公子は鳩のために仇を討った。

〔対象〕不(足)「為」外(人)道(也)。(陶潜「桃花源記」) 不(足)「為」外(人)道(也) 國外界の人に告げるには及ばない。

(5) 「与」の用法

〔関与〕曹(參)二(微)時(与)蕭(何)善。(2005) I・II「千百年眼」 曹(參)微(時)与(蕭)何(善) 國曹參は身分が低かったころ、蕭何と仲が良かった。

〔処置〕必(与)公(士)為(賓)也。(礼・玉藻) 必(与)公(士)為(賓)也 國必ず公士を賓とするのである。

〔目的〕嘗(与)人(備)耕。(史・陳涉世家) 嘗(与)人(備)耕(耕) 國以前人のために備われて耕作した。

〔受動〕遂(与)句(踐)禽(禽)。(国策・秦五) 遂(与)句(踐)禽(禽) 國そのまま句踐に捕らわれた。

※「与」〇は、関与の対象を表す場合は「〇与」とあるいは「〇下」と「二」と読み、処置の対象を表す場合は「〇ヲ与テ」と読む。目的を表す場合は「為」と同じと見なして「〇ノ与テ」と読み、受動の場合は「〇与テ」(Pセラルル)と読む。

九、助詞

構造助詞「之」「者」「所」は、文の語法的な組み立てを明らかにする働き

而(二)卒(越)王(之)殺(一)而(父)父(卒)。(左・定四) 而(二)卒(越)王(之)殺(一)而(父)父(卒) 國そなたは越王がそなたの父を殺したことを忘れたか。

爾(二)忘(句)踐(殺)爾(父)。(史・伍子胥伝) 爾(二)忘(句)踐(殺)爾(父) 國そなたはわが公室からの出です。

③述語構造および前置詞構造において、目的語を強調するために前に出したとき、目的語と動詞あるいは前置詞との間に置いて目的語の倒置であることを明示する。なお、訓読では「こゝ」と読む。

〈a〉述語構造の場合

O(N) P……述語構造(P-O)

〔実(汝)之(由)由。(2002)追(楊文公談苑) 実(汝)之(由)由(由) 國本當にお前の行動の原因することになる。

〔何(禮)之(論)論。(2001)追(後漢書) 何(禮)之(論)論(論) 國礼法など問題になろうか。

〈b〉前置詞構造の場合

O(N) (N)前……前置詞構造(前置詞-O)

康(公)二(我)自(出)。(左・成三) 康(公)二(我)自(出) 國康公はわが公室からの出です。

〈二〉「者」の用法

①形容詞・動詞・述語構造などの後に置き、人物・事柄・状況・理由などを表す名詞句を作る。

〔形容詞・動詞・述語構造(者)〕



愚二(益)愚。(韓愈・師說) 愚益愚おろそかに。國愚おろそかにか者はいっそう愚かにならぬ。

②目的語の時

「攻遠(者)二遣近。(2009『杜梅堂文集』) 攻い遠者遣い近おのちか。國遠方を攻撃する者は近隣を遣わしている。

③代詞「其」を承けた時

(不)知一(其)細。(1993『劉孟榮集』) 不知其細おろそかに。國詳しい事柄はわからない。

④助詞「之」を承けた時

(空)生一(虚妄)之(美)。(1986『論衡』) 空生虚妄之美おろそかに。國意味もなくためらめな修飾を産みだす。

【動詞化】

①目的語を取った時

(吾)郷(錢)明経二善一詩賦。(2007『竹葉亭雜記』) 吾郷錢明経善二詩賦おろそかに。國私の同郷の錢明経は詩賦に巧みであった。

②助詞「所」を承けた時

「以」(所)多(見)一(所)鮮。(一史・貨殖列伝) 以「所」多見「所」鮮おろそかに。國多いと思ふものを少ないと思ふものと交換する。

③使動用法

本来、使役の意味を持たない動詞、あるいは名詞や形容詞の動詞化による動詞が、そのまま使役の意味を担うことをいう。なお、訓読では動詞に対して使役を表す送り仮名「シム」を送る。

P-O → 使-O = P

①動詞の使動用法……ふつう目的語を取らない自動詞が目的語を取ることで使動に転じる。

(一)鉅公二招客一訓子。(2002『清波雜志』) ↓使「子」二訓。一鉅公招客訓子おろそかに。國ある大人物が客人を招いて子供の教育に当たらせた。

②形容詞の使動用法……目的語に対して形容詞の表す性質や状態を与えることとなる。

天二(不)能「貧」。(荀・天論) 天不能「貧」おろそかに。國天ですら民を豊かにさせられない。

天二(不)能「使」之「富」。(荀・天論) 天不能「使」之「富」おろそかに。國天ですら民を豊かにさせられない。

③名詞の使動用法……目的語に対して名詞自体の表す立場や内容にさせることを表す。

爾二欲「吳王」我「平」。(左・定十) ↓爾二欲「使」我「吳王」(平)。爾欲「吳王」我「平」おろそかに。國お前は私を刺し殺された(呉王のようにさせたいのか)。

④使動用法

名詞あるいは形容詞は動詞化することで、目的語に対して「〜と思う」「〜見なす」という主観的な判断を表す。訓読では、動詞化した形容詞や名詞に対して「〜トス」と送る。

P-O → (以-O) 為-O

①形容詞の使動用法

帝二然之。(2008『衡廬精舍藏稿』) ↓帝二(以)之為然。帝然おろそかに。之おろそかに。國皇帝はそのとおりだと思った。

②使役形

使役形は、兼語式の代表的なケースで、一文に動詞が二つある。

S = P (使・令・遣・教・命・俾)「兼語」= P-O

始皇二使「信」信二伐一荆。始皇使二信伐一荆おろそかに。國始皇帝は李信に楚を討たせた。

※訓読では、日本語にはない兼語式の使役の構文を処理するために兼語を「使役の対象」としてそれに「フシテ」を送り、前の述語(「〜」では「使」)を「シム」と読む。また、「遣」や「命」の場合は、これを「シム」と訓読するときもあるが、ふつうは先に「〜ヲ遣ハシテ」「〜ニ命ジテ」と読んでから、後の動詞(「〜」では「誅」)に「〜シム」を送って読む。

命「吏」二誅一之。(2000『呂氏春秋』) 命「吏」誅一之おろそかに。國役人に命じて申公子培を殺させようとした。

③存在形

存在形の基本の句は、次のようになる。

S 二有「兼語」= P-O

有「納卷」(者)「納卷」(者)二過一(其)旁。有「納卷」(者)「納卷」(者)二過一(其)旁。(2007『竹葉亭雜記』) 有「納卷」者過「其旁」/有「納卷」者過「其旁」おろそかに。國答案を回収する役人で銭のそばを通るものがいた。

※訓読では、こうした存在文に対する訓読の処理として、先に「有」

②名詞の意動用法

子二(其)子。(1986『竜川文集』) ↓以「其」(子)為子。子二其子おろそかに。國その子を自分の子として慕む。

③為動語用法

ふつうの述語構造のように述語動詞が目的語を支配するのではなく、動詞あるいは名詞の動詞化によって、その行為が目的語のために行われたいという意味を表す。

P-O → 為-O = P

①動詞の為動用法

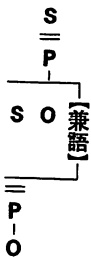
死義二(吾)公(也)。(2002『道』新序) ↓為「義」死二(吾)公(也)。死「義」吾公也おろそかに。國義のために死ぬのが私の公としてのあり方である。

②名詞の為動用法

佗二脈之。(三國・華佗伝) ↓佗二(為)之脈。佗脈之おろそかに。國華佗は陳登のために脈を診た。

十一、兼語式の文

漢文には、「兼語式」という二つの述語をもつ文がある。本来、二つの文が共通する目的語と主語とを接点として一つに融合した文である。この共通の語を「兼語」といって、この文を「兼語式」という。これは日本語にはない語法で、使役形と存在形とがこの構文をとる。







〔愚人(之)〕〔所(能)〕〔未(必)非(聖)人(之)〕〔所(不能)也〕。  
 (196)『劉孟漆集』 愚人之所(能)未(必)非(聖)人之所(不能)也。  
愚人のよきところをいふはかならず聖人のよきところより劣るべし 愚人がでることば、必ずしも聖人ができないことではないというわけではない。

〔五〕無条件であることを示す用法

「無A無B」「無A B」におけるA・Bには対立語が置かれ、条件節を作り「A・Bを問わず、……」という意味を表す。

無A無B ⇄ 無A B

※訓読では「Aト無クBト無ク(無)A無(無)B」「A Bト無ク(無)A B」のように読む。

無「貴」賤「皆」称「我」。(168)『夢溪筆談』 無「貴」賤「皆」称「我」。  
我れは高きも低きも 國(相手の身分の)高いか低いかを問わず、皆に俺と言っていた。

〔六〕禁止の文

禁止は、主に禁止の副詞を用いて、強い差し止めや行為をしないことの勧告をするものである。



(勿)〔遽〕取捨於(其)問。(169)『朱子文集』 勿〔遽〕取〔捨〕於〔其〕問。  
いかにせんかんに 國(性急に色々の説のよしあしを決めてはいけない)。  
 公二勿責婢。(168)『閩徵堂筆記』 公勿責婢。  
下女を責めてはいけない。

④疑問代詞が目的語の場合

疑問代詞を目的語とする「述語構造」および「前置詞構造」では、疑問代詞の目的語が述語や前置詞の前に出されて、目的語の倒置が起こる。

〔a〕「述語構造」の場合

(其)理二安在。(166)『道』西陽雜俎』 ↓「在」安 其理安在。  
國その道理はどこにありませうか。

※「述語構造」が助動詞の目的語となった場合、倒置された目的語は助動詞の前に出される。

何能「為」。(200)『杜梅堂文集』 ↓「能」為「何」 何能為。  
國どうして(何を)「ほす」ことができたであろうか。

〔b〕「前置詞構造」の場合

子二何「以」教之。(史)張儀列伝』 ↓「以」何「」 子何以教之。  
子先生はなにを教えようとするのか。  
 曷「為」見「臣」。(199)『追』晏子春秋』 ↓「為」見「曷」 曷為見臣。  
國どうして(何を)招きくださったのですか。

誰与「為」偶。(200)『追』後漢書』 誰与為「偶」誰が私と比べれようか。

※何(以)なに(ヲ)もつテカ(ニ)は、本来前置詞構造としては「以何」の語順であったが、前置詞の目的語が疑問代詞であることから倒置されたもので「なぜ、どうして、どのよう」など理由や手段を問う。例として「曷」も書かれる。「奚」も「なんす」(「何」)「曷」も「胡」も「なぜ、どうして、何のため」など原因や理由を問う。「誰与」は「本来、与誰(たれと)」であるが、倒置した時は「誰(と)たれ(と)もニカ(ニ)与」を副詞のよう

十三、疑問文

〔一〕是非型の疑問文

「はいか」「いいえ」の判断を求めるもので、平叙文に対し語順の変化などを伴わずに、そのまま文末に疑問の語気助詞(乎・哉・与・耶など)を置くことで成り立つ。

S = P-O(乎・哉・与・耶)

而二独「非」聞「与」。(200)『追』新書』 而独非「聞」与「前」は聞いていないのか。

此二「必」得「大」魚「乎」。(168)『鉄困山叢談』 此必得「大」魚「乎」。  
これら魚はきつと大きな魚をつかまえたのではないか。

〔二〕特定型の疑問文

疑問代詞を用いて、不明の対象や原因理由などを回答させるもので、文末に疑問の語気助詞がなくともよいが、置く場合もある。

①疑問代詞が主語の場合

孰二可「為」比「乎」。(200)『追』後漢書』 孰可「為」比「誰」があなたに匹敵できようか。

②疑問代詞が述語の場合

来(者)二誰「乎」。(199)『唐語林』 来者誰「乎」か。國(やつて来た客は誰であったか)。

③疑問代詞が修飾語の場合

公子二「何」人「乎」。(168)『論衡』 公子何人「乎」か。國(公子はいかほどの人物か)。

④疑問代詞が述語の前に置かれた場合

鼠二「何」(名)老虫「乎」。(200)『雪濤小説』 鼠何名「老虫」乎。  
なにをいって老虫と呼ぶのだ。

〔三〕選択型の疑問文

二つの項目(A・B)に対して、ある条件(C)について比較したうえで選択する疑問文である。

①A与B(S)二孰(S)二孰(C)二孰(A)

吾「与」徐公二孰「美」。(國策)齊一 吾「与」徐公二孰「美」乎。  
私と徐公とはどちらが美しいであろうか。

②A(S)二孰与(P)二孰(B)(O)

吾二孰「与」徐公「美」。(國策)齊一 吾孰「与」徐公「美」乎。  
は、徐公とどちらが美しいであろうか。

早救二孰「与」晚救「乎」。(國策)齊一 早救二孰「与」晚救「乎」乎。  
救之「便」(早く)救するのと遅れて救助するのとどちらが良いであろうか。

③A(S)二孰与(P)二孰(B)(O)

蚤救二孰「与」晚救「乎」。(史)田敬仲完世家 蚤救二孰「与」晚救「乎」乎。  
蚤(早く)救するのと遅れて救助するのとどちらが良いであろうか。

※訓読では、①は「AトB与ハ、孰レカCナル」(A与B孰C)と読み、AとBとはどちらがCであろうかという意味になる。  
 ②では「孰与」は「いずれ」と熟して読み、「Aハ、BノCナル」孰与B(と)A孰(と)B(C)と読み、「Aは、BのCであることに

比べてどうであろうか」という意味になる。③は、②の条件Cが省略された形で「A」・「B」二執と「A」・「B」二執と読み、「A」は「B」に比べてどちらが勝るか」という意味になる。

▼以上の三形式の選択疑問は、AとBとの比較をする意味において同じであることから、それぞれの形式で書き換えることも可能である。

- ①(今時)如耳／魏齊(与)孟嘗／卯亡「孰賢者」。(史・魏世家)
  - 今時如耳魏齊与孟嘗卯亡孰賢者
  - 耳・魏齊と孟嘗・卯亡とはどちらが賢者であろうか。
- ②(今)(之)如耳／魏齊二孰与(孟嘗)亡卯(之)賢。(国策・秦四)
  - 今之如耳魏齊孰与孟嘗亡卯之賢
  - 耳・魏齊と孟嘗・亡卯とはどちらが賢明であろうか。
- ③(今)(之)如耳／魏齊二孰与(孟嘗)亡卯。(韓・難三)
  - 今之如耳魏齊孰与孟嘗亡卯
  - 耳・魏齊と昔の孟嘗・亡卯とはどちらが賢いであろうか。

十四、反語文

反語文は、修辭的な疑問文であり、実際に疑義や質問があるのではなく、強調した表現をとるために肯定と否定とを入れ替えて疑問文形式を用いたものである。

〈一〉疑問文と同じ形態

疑問か反語かの判別が困難なものもあり、文脈上から判断しなければならぬ場合もある。

①是非型の反語文

S = P-O(平・哉・与・耶)

(不)尤遠(乎)。(2008『衡廬精舍藏稿』) 不尤遠一乎

②特定型の反語文

(何)啻(一)反(掌)之(易)。(2008『龍川文集』) 何啻反掌之易

③反語の副詞(豈・寧・焉・庸など)を用いた反語文

S = (一)反語の副詞 P-O
(豈)有(一)不(亡)者(哉)。(2009『杜梅堂文集』) 豈有(一)不(亡)者(哉)
城中(一)安(得)有(一)此(獸)。(2004『雪濤小説』) 城中安得(一)有(一)此(獸)
(寧)可(一)有(一)此(一)。(1986『搜神記』) 寧可(一)有(一)此(一)

〈二〉固定した形態

①S = (何)O(之)一有(一)S = 有(何)O

宋(一)何(罪)之(一)有(墨・公輸)一有(一)何(罪) 宋何罪之有

②S = 敢(一)不 P-O

助動詞「敢」と副詞「不」との連合で、強い志向を確認する反語文を作る。

臣(一)敢(一)不(聽)令(乎)。(国策・趙三) 臣敢不聽令乎

〈一〉限定文の応用形

- ③副詞と助詞とを併用した場合……S = (副詞)P-O(助詞)
  - (止)(鼠)技(耳)。(2004『雪濤小説』) 止鼠技耳
  - 能力にすぎない。

私はどうして敢えて「命令に従わない」ことがありましようか。

▼「敢」と「不」を入れ替えた「不敢(未敢・弗敢)」は、強い否定を表す。

(不)敢(一)明(一)点(欺)心。(2002『清波雜誌』) 不(一)敢(一)明(一)点(欺)心

十五、限定文

状況や範囲・程度の限定を表現する文で、限定を表す副詞や助詞を用いて作る。

〈一〉限定文の形態

限定を表す副詞を用いるか、限定の意を持つ陳述の助詞を文末に置くか、それらを併用する。

①副詞のみを用いた場合……S = (副詞)P-O

工夫(一)口(一)及(一)此。(1996『西陽雜俎』) 工夫口及(一)此

②助詞のみを用いた場合……S = P-O(助詞)

西施(一)一(一)嬪(嬪)耳。(2009『杜梅堂文集』) 西施(一)嬪(嬪)耳

③副詞と助詞とを併用した場合……S = (副詞)P-O(助詞)

(止)(鼠)技(耳)。(2004『雪濤小説』) 止鼠技耳

か(一)は(一)な(一)は(一)だ(一)し(一)く(一)離(一)れ(一)な(一)い(一)で(一)あ(一)ら(一)う(一)か。

③反語の副詞(豈・寧・焉・庸など)を用いた反語文

S = (一)反語の副詞 P-O
(豈)有(一)不(亡)者(哉)。(2009『杜梅堂文集』) 豈有(一)不(亡)者(哉)
城中(一)安(得)有(一)此(獸)。(2004『雪濤小説』) 城中安得(一)有(一)此(獸)
(寧)可(一)有(一)此(一)。(1986『搜神記』) 寧可(一)有(一)此(一)

〈二〉固定した形態

①S = (何)O(之)一有(一)S = 有(何)O

宋(一)何(罪)之(一)有(墨・公輸)一有(一)何(罪) 宋何罪之有

②S = 敢(一)不 P-O

助動詞「敢」と副詞「不」との連合で、強い志向を確認する反語文を作る。

臣(一)敢(一)不(聽)令(乎)。(国策・趙三) 臣敢不聽令乎

限定を表す副詞は、否定の副詞「不・非」あるいは反語の副詞「豈・何」と重ね用い、ある状況や範囲・程度に限定されないことを表す。

S =
(不)唯(惟)・但(特)・徒(啻)・独(一)
(非)唯(惟)・但(特)・徒(啻)・独(一)
(豈)唯(惟)・但(特)・徒(啻)・独(一)
(何)唯(惟)・但(特)・徒(啻)・独(一)

①否定の副詞との組合せ

「放(於)利」(者) = (不)推(収)怨。(1984『赤山会約』) 放(於)利(者) 不(一)推(収)怨(一)

②反語の副詞との組合せ

(豈)独(一)一(一)琴(一)哉。(2005『郵離子』) 豈(一)独(一)一(一)琴(一)哉(一)

十六、詠嘆文

強い感情としての喜び・悲しみ・怒り・驚きなどの情緒を表現する文である。

〈一〉詠嘆文の種類

独立成分の嘆詞を用いるか、詠嘆の語気助詞を文末に置くか、あるいはそれらを併用する。

①嘆詞のみを用いた場合

嗚呼(一)堯(一)舜(一)二(一)大(一)聖(一)也(一)民(一)且(一)謗(一)之(一)。(1995『原謗』) 嗚呼、堯舜大聖也、民且謗之

漢文読解の基礎

②語氣助詞を用いた場合

(其)人(亦)可(哀)哉。(2001「追」東齋記事) 其人亦可哀哉

③嘆詞と語氣助詞とを併用した場合

嗟乎(豈)為(是)哉。(1969『能改齋漫録』) 嗟乎、豈為(是)哉

④その他の詠嘆文

疑問や反語の構文を借りて詠嘆の意を表す。

(何)其(暴)而(不)敬(也)。(2000『呂氏春秋』) 何其暴而不敬也

⑤固定した詠嘆の句

S(不亦)P(乎)

(不亦)宜(乎)。(1993『追』焚書) 不亦宜乎

十七、受動文

ふつうの叙述文は「主動者A(S)が、受動者B(O)を動詞(P)する」と述べるが、受動文では「受動者B(S)が、主動者A(時に省略)に動詞(P)される」となる。

①「前置詞」方式

前置詞構造「於」A(主動者)を述語の後に置くことによって、主動者Aを明示しつつ受動を表す。

A(主動者) = P-B(受動者)

⇔

B(受動者) = P(於)A(主動者)

是二役(於)詩(也)。(1979『近世先哲叢談』) 是役(於)詩(也)

②「助動詞」方式

受動の助動詞「見」被」を用いる。主動者を明示する場合は、前置詞構造「於」A(主動者)を述語の後に置き、結果的には、前置詞方式の受動構文に助動詞「見」被」を加えた形になる。

A(主動者) = P-B(受動者)

⇔

B(受動者) = 見被」P(於)A(主動者)

① B(受動者) = 見被」助動詞「P」

囚(遂)見(原)。(2001『大唐新語』) 囚(遂)見(原)

② B(受動者) = 見被」助動詞「P」(於)A(主動者)

弥子瑕二見(愛)於(衛)君。(史)老在申韓伝 ↑(衛)君二愛(弥)子瑕 弥子瑕見(愛)於(衛)君 弥子瑕見(愛)於(衛)君に寵愛された。 (万)乘(之)國(二)被(困)於(趙)。(國)策(齊)六 ↑(趙)二(田)万(乘)之(國) 万(乘)之(國)被(困)於(趙) 國(万)乘(之)國(二)被(困)於(趙)に包圍された。

③ 「被」は、西晋のころ助動詞から前置詞に転化し、独自の構文を作るようになった。

B(受動者) = 被(前置詞)A(主動者)P

漢文読解の基礎

亮子(二)被(蘇峻)害。(世説・方正) 亮子被(蘇峻)害 / 亮子被(蘇峻)害

②「為」字方式(為)A(所)P

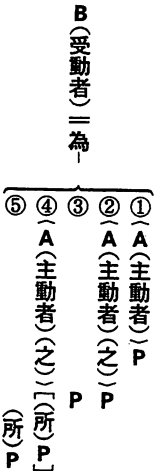
A(主動者) = P-B(受動者)

⇔

B(受動者) = 為A(主動者)(二)所P

不肖(二)為一人(二)所憎。(蘇軾・答李端叔書) 不肖為一人所憎

※この「為」字方式の基本形は、「B(二)為一人(二)所P」で、訓読では「B(二)為一人(二)所P」(BはAの所)となる。その本来的な構文は、「所」字により名詞句化された述語を用いた判断文(名詞述語文)である。主動者Aはその修飾語となるもので、「為」は判断動詞であった。 また、この方式の受動形は、次のようにいくつかの形式に変化する。



連累(為)鞭杖。(1997『搜神記』) 連累為鞭杖

為(鼠)(二)所齧。(1997『追』三國志) 為(鼠)所(齧)

先(即)制(人)後(則)為一人(二)所制。(史・項羽本紀) 先(即)制(人)後(則)為一人所(制)

臣(二)不肖(棄)逐於(秦)。(國策・秦三) 臣(二)不肖(棄)逐於(秦)

我(二)不肖(為)秦(二)所(棄)逐也。(戰國策・高誘注) 我(二)不肖(為)秦(二)所(棄)逐也

無術(則)制(於)人。(准・主術) 無術(則)制(於)人

為一人(二)所(擒)制也。(淮南子・許慎注) 為一人所(擒)制也

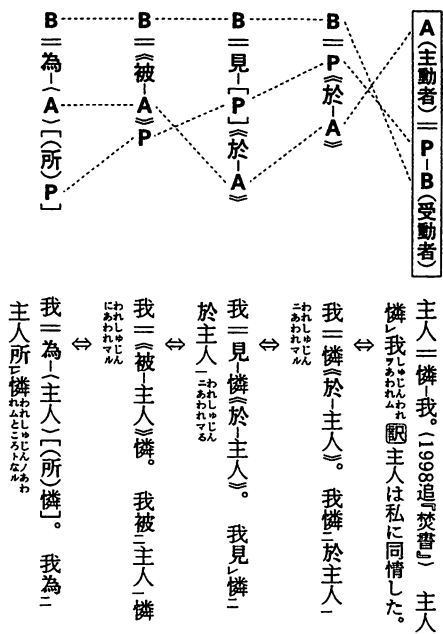
②「助動詞」方式

年(二)四十(而)見(惡)焉。(論・陽貨) 年(二)四十(而)見(惡)焉

年(二)在(不)惑(而)為一人(二)所(惡)。(論語集解・鄭玄注) 年(二)在(不)惑(而)為一人所(惡)

〔動〕而見「尤」。(司馬遷 報任少卿書) 動而見「尤」尤が尤とと「國」行動する  
 と非難されます。  
 〔挙動〕必為一人之(之)「所」尤過也。(文選 李善注) 挙動必為三人  
 之所「尤過」也尤が尤とと「國」振る舞うときと人から非難され  
 ます。

▼受動の構文は、次のようにそれぞれ相互に書き換えが可能である。



### 十八、比較文

〈一〉比較の前置詞による比較

比較の前置詞(於・于・乎)を用いて「Aは、Bよりも形容詞(P)である」という内容の比較を行う文は、本来、単純な描写文(S = P)に対し、比較の対象を前置詞の目的語として明示したものである。この場合、前置詞構

造は必ず述語の後に置く。

A(S) = 形容詞(P) (於)B  
 狸奴 = 非靈(於)人。(2008 胡祭酒集) 狸奴非「靈」於人狸奴は人よりもすぐれているというわけではない。

〈二〉「A不如B」による比較  
 比較の構文「A不如(若)B」を用いて「A(主語)は、B(目的語)に及ばない」という比較を示すものである。「不如」はまた「弗如」「弗若」とも書かれる。なお、訓読は「AハBニ如(若)シカズ(A不<sub>レ</sub>如(若)B)」となる。

A(S) = 不(如)若(B)(O)  
 法士 = 自知「吾不<sub>レ</sub>如(若)楊」也。(2008 衡廬精舍藏稿) 法士自知「吾不<sub>レ</sub>如(若)楊也」法士は自知「吾も楊に及ばないことを自覚していた。」

〈三〉「A莫如B」による比較

比較の構文「A莫如(若)B」を用いて「Aについては、Bに勝るものはない」という最善の条件を示すものである。表面上「A不如B」に似るが、構文上は全く異なる。すなわち、Aは主述述語文における主題主語で、その主述述語(莫(S) = 如(P) = B(O))内の主語である。莫は人物や事物の無存在を示す無称代詞で、英語のnobodyやnothingに相当し、その述語構造は「Bに及ぶもの(如B)」である。したがってAは話題の範囲の限定で、その範囲においてBに及ぶものの存在が否定されるのである。なお、訓読は「AハBニ如(若)クハ莫(若)シ(A莫如B)」となる。

A(S) = 莫(S) = 如(若)(P) = B(O)  
 衣 = 「莫」若「新」。(晏 雜上) 衣莫「若」新衣は新品に越したことはない。  
 (夫)能「行」救人(之)心(者) = 「莫」若「良」医。(2008 能改

斎漫錄「夫能行「救」人之心「者」莫「如」良医」夫能人の心「を」救ふ「者」は良医に如く  
 國「も」も人々を救済しようという思いを實行できるものとしては、名  
 医にまさるものはないのだ。

### 〈四〉複合的な比較

「莫」と前置詞「於・于・乎」による比較の構文とを組み合わせたもので、「Aについては、B(前置詞の目的語)よりも形容詞(P)であるものはない」という意味を表す。

A(S) = 莫(S) = 形容詞(P) (於)B  
 (天下)之(國)「莫」強「於」越。(晉 擊重甲) 天下之國莫「強」於越天下の國は越よりも強いものはない。  
 (夫)鬱「莫」「甚」於「病」(者)。(1661 追 袁中郎全集) 夫鬱「莫」  
 甚「於」病「者」鬱は病よりも甚だしいものはない。  
 鬱「莫」  
 鬱「莫」  
 鬱「莫」

▼前置詞構造「於」此「焉」の二字は、「焉」に縮約され、次のような表現も生まれる。

德 = 「莫」厚「焉」。(左 傳) ↑「於」此「焉」 德莫「厚」焉徳は莫く厚くはない。  
 國 國義としてこれより手厚いものはない。